

# 源流から河口までかけ足 見て歩き

- 川を利用した学習へ向け、流域見学会 -

岐阜分室 石川 高史

以前にも本誌で紹介した庄内川流域の学校と河川管理者の連携による、川を利用した学習に向けての取り組みの紹介パート2。今回は学習を指導する側の先生方に、まず川を知ってもらおう！というわけで流域見学会が実施されたので、その様子などを紹介する。

## 庄内川

はからずも平成12年9月の東海豪雨によって全国に一躍その名を知られることとなった庄内川は、全長96km、流域面積1,010km<sup>2</sup>の河川である。岐阜県及び愛知県域を流れており、大都市名古屋の西部を貫流して、一時期これまた全国に知られた「藤前干潟」の東隣に庄内干潟を形づくって伊勢湾に注いでいる。

## 流域見学会の見どころ

見学行程上、次の4地点にしばられた。庄内川源流、庄内緑地公園（小田井遊水地、この直近上流側に庄内川の水を新川へ落す洗堰がある。）及び小田井床止魚道、ビオトープ実験地、庄内川河口（干潟）。

## 庄内川源流

すぐ近くまで車で行ける。車を降りて10分ほど歩けばそこが源流。先生方の期待が大きすぎたのか「どこ、どこ？」、「これが源流!？」、一寸拍子抜けの様子。気を取り直して建設省職員の説明に耳を傾け、カメラでパチリ、「八丁トンボもいるそうだ!」。8月の暑さもここではさすがに違う。

## 庄内緑地公園及び小田井床止魚道

庄内緑地公園は庄内川の洪水時には遊水地となること、この上流側に尾張藩の時代に名古屋城下を守るためにつくられた洗堰があることなど治水にかかわる説明を聞き、パネルの図や写真を眺めつつ、「それは知らなかった!!」、「江戸時代だからできたんだ!!」。この時、神ならぬ身の誰もが、庄内川の洪水流が洗堰から新川へ流入し、新川決壊の一因になったとも言われる9月の豪雨災害など夢にも思わなかったに違いない。その庄内川の現地を流域見学会で見た直後だけに、豪雨災害は先生方にはショッキングな出来事だったのではなからうか。

床止の魚道では、暑さも何のその、熱心に見学されていたが、「こんなに水が汚いなんて!」、「こんなところで魚はいるんだ!」、「本当にアユがのぼってくるの?」。かつてに比べれば格段に水質が良くなった庄内川だが、この付近ではまだまだ清流にはほど遠い。

## ビオトープ実験地

企画、設計段階から市民団体が参画した実験地。追跡調査や維持管理も市民団体の参画が進められる。実験地内に設けられた木製の観察通路をたどって興味津々で見えてまわる。隣り同士で話し合ったり、建設省職員へ質問したり、汗びっしょりになっての川の自然の体験。「カニがいる!」、「この草はなんていうの!」、「こんなに色々見られるとは思わなかった!」。

## 庄内川河口（干潟）

引き潮の時間に合わせて現地を見ることにしていたので、干潟が現れており、多くの鳥がエサをついばんだり、羽を乾かしたりしている。左岸側に県の野鳥観察館があり、エアコン・望遠鏡（多数）つきなので、先生方はここにクギづけ。鳥の専門家は常駐していないが、管理人から話を聞いたり、質問したりして“干潟の鳥観察会”は時間が足りなくなってしまった。

## 意見交換、アンケート

移動の車中を利用して、川を利用した学習についての意見交換（現状や可能性、実践にあたっての問題点や河川管理者への要望事項、見学会に参加しての感想etc）や庄内川を紹介したビデオの上映、先生方への川を利用した学習についてのアンケート（当日及び後日回収）などが実施された。

## 取り組みの推進に向けて

教育関係者と河川管理者の連携による川を利用した学習の可能性を感じとれる流域見学会であった。今後も様々な場や方法を工夫するなど、川を利用した学習の取り組みが進むようにしていきたいものである。



写真 - 1 小田井床止魚道にて